

全日本ロボット相撲全国大会2018

世界一



全日本ロボット相撲全国大会2018で、 第30代横綱・関脇(世界1位・3位)に!

平成30年12月に両国国技館で開催された「全日本ロボット相撲全国大会」。811台が参加した地区大会を勝ち抜いた64台のロボット力士と、海外35カ国で行われた公認39大会の開催国代表および優勝ロボット力士148台が集結し、熱闘を繰り広げました。自立型の部では、東海能開大から出場した「電エネ2号」が横綱(世界1位)に、「インディゴ」が関脇(世界3位)に輝きました。



電気エネルギー制御科2年生
後列左から **山口 雄也さん** **加藤 千貴さん**
(岐阜第一高等学校出身) (愛知産業大学工業高等学校出身)
前列左から **高田 真矢さん** **加藤 匠さん**
(岐阜第一高等学校出身) (大垣西高等学校出身)

先生からのメッセージ



榎原 康弘先生

ロボット相撲は、鉄製の土俵上に2台のロボットを置き、相手を土俵外に押し出すことで勝敗が決まります。サイズは幅20cm×奥行き20cm以内、体重は3000g以内であれば自由に製作することができ、「自立型」はコンピュータプログラムで戦うスタイルです。鉄板でできた土俵に磁石を付けたロボット力士を置くため、いかに相手の下へ潜り込んで浮かせられるかが、重要なポイントになります。そのため今回の東海能開大のロボットは、先端の刃物の調整に力を入れ、向かってきた相手を乗り上げて押し出す戦術を多用しました。

横綱

電気エネルギー制御科
加藤 匠さん
電気エネルギー制御科
高田 真矢さん

本校で製作しているロボット力士は、相手を見つけるための目にあたる部分に赤外線センサーを使用しています。全身を黒くした相手と試合をすると、そのセンサーでは相手を感じにくいいため、死角から攻撃され負けてしまうということがよくありました。そこで今回は、新たな種類のセンサーを追加で搭載して挑むことで、相手をしっかりとらえることができ、弱点を補えたと考えています。また、予選である地区大会からさまざまなタイプのロボットと戦ったことで、自分のロボットの強みや欠点を改めて見直すことができました。結果、世界大会では柔軟に対策を立てることができ、世界1位に至ることができたのだと思います。

関脇

電気エネルギー制御科
山口 雄也さん

土俵表面の塗装は、会場によって状態が多少異なるため、ロボット前方に取り付けてある刃物の調整が最も難しいのですが、今回はそのセッティングがよかった点が勝因だったと思います。準決勝でトルコチームに負けた時は、やはり落ち込みましたが、気持ちを切り替えて3位決定戦に臨みました。結果、突進してきた相手が前方の刃物に乗り上げたところを押し出すという、イメージ通りの展開になり、勝った時はとてもうれしかったです。世界大会はどれもこれまでにない緊張感でしたが、とてもいい経験になりました。